特集

地域の中の「コミュニティデザイナー」はいかに生まれるか

《2》大学によるコミュニティデザイナー育成への挑戦
～東北芸術工科大学・日本初のコミュニティデザイン学科～

平成26年（２０１４年）４月、東北芸術工科大学（山形県山形市）に日本初のコミュニティデザイン学科が創設された。まちの担い手となるコミュニティのデザインに取り組んできたstudio-Lのメンバーが講師陣を担うこの学科における「プロフェッショナルのコミュニティデザイナー」の育成について、副学科長の岡崎エミ准教授と醍醐孝典准教授に現在の取組と今後の展望をうかがった。

1 日本初のコミュニティデザイン学科のねらい

――東北芸術工科大学が日本で初めてコミュニティデザイン学科を設置したねらいを教えてください。

○岡崎　学科長の山崎亮が10年前、平成17年（２００５年）にstudio-Lを設立した理由の一つに、阪神淡路大震災がありました（注1）。一見復興したように見えた神戸の街で、多くの孤独死が発生し、震災の影響は10年以上も続きました。それを知っていた山崎は、今回の東日本大震災でも同様に、世の中から忘れられるような状況になっても支援を継続していくことが重要だと感じ、何か長期的に役に立てないかを考えていました。そんな時に、東北芸術工科大学からコミュニティデザイン学科の設立に協力してほしいという話があり、まさに私たちが被災地を長期間かけて支援できる方法だと考え、快諾しました。

また、コミュニティデザイナーを育てていく場として、山形は最適な場所だとも考えています。被災地に近いこと、すでに過疎や限界集落などの課題が表面化しているなど、「課題先進地」であり、まさに現場で学ぶことができます。地域づくりに正解はありません。地域によって住む人も違えば、歴史も文化も違います。ましてや、関わる我々との組み合わせまで考えると、天文学的な数値になります。だからこそ、試行錯誤しながら、そこに住む人たちと一緒に作っていくことが必要になります。そのような経験を東北の方々の胸を借りながら、させていただいているのです。

●醍醐　studio-Lで10年活動してきた中で、コミュニティデザイナー的な人材が社会から求められているということを実感していますが、そのニーズに応えられる人材はまだ少ないのが現状です。東日本大震災の被災地を始めとして、ふるさとを元気にする仕事に就く、次の世代の若者を育てたいと思っています。

――コミュニティデザイン学科の構成について教えてください。

●醍醐　平成26年４月に設立されて、今年２年目となりました。山崎学科長以下studio-Lのメンバー５名で准教授と講師を担っています。学生は１年生が32人、２年生が35人所属しています。性別では女性が７割くらいです。地域では地元山形の学生が半数ほど、お隣の宮城の学生も２割程度になります。その他では、秋田、青森など東北地方が多く、関東地方から数名、静岡や中部、関西、四国からも来ています。地元をどうにかしたいという意識を持った学生が多いですし、課題解決の新しい手法を学べると思って来ている場合もあります。キャラクター的には優しい、おっとりした感じの学生が多く、そこが地域に入っていく際には長所でもあり、課題にもなってくると感じています。

現場での実践の場を数多く用意

――どのようなカリキュラムを組まれていますか。

岡崎　エミ
東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科副学科長・准教授

醍醐　孝典
東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科准教授

○**岡崎**　ワークショップやデザインのようなstudio-Lが業務で実践している手法を学んだり、さまざまな事例を頭に入れたりしていきます。

また、コミュニケーションが重要なスキルになりますので、リーダーシップ、ファシリテーションなど、場面に応じたコミュニケーションのノウハウ、例えば人の行動を変えるためには、どのような質問を投げかけるとよいかというようなことも学びます。

さらに、社会がどこへ向かっているかというような哲学的な議論や幸福論的なことも学んでおくことがコミュニティデザインに生きてきます。今年の夏は集中講義で遠野へ行き、生態系における循環のあり方等を学びます。地域の特色を自然環境も含めて把握することは、コミュニティの文化、歴史、生活のあり方などを理解することにも役立ちます。

――コミュニティデザインを実践できる現場に出て行く機会も多いのでしょうか。

○**岡崎**　1年生の前期課程では2泊3日の学科旅行で山形県川西町吉島地区に行っています。きらりよしじまネットワークという町内会機能を担っている全世帯加入のNPO法人があるのですが、吉島のみなさんが開催している地域のワークショップなどに混ぜていただいて、学生の視点でアイディアを出すようなことから始めています（**写真1**）。

2年生は通常の授業の中で地域に入りまして、3年生の後半からは、卒業研究のために自分がコミュニティデザインを実践するフィールドを見つけてくることを求められます。

現場の経験は繰り返しが必要なので、普段の授業でも、高校への出張事業なども含め、なるべく多くの実践の場を作るようにしています。

●**醍醐**　山形は横浜などの都市部に比べるとNPOなど地域課題の解決に既に取り組んでいる団体が少ないので、課題を一から議論していくことが必要な場合も多く、見方によっては学生たちにとって学びの多い環境と言えます。

写真1　1年生の吉島地区ワークショップ

2年生から3年生の前半にかけての授業では、学科の准教授、講師の4名がそれぞれに山形県内で現場（「スタジオ」と呼んでいます）を持って、学生はそのいずれかのスタジオに所属して活動します。私のスタジオは金山町の中田地区で、廃校になった小学校の跡地活用を、地元の30代の男性たちが立ち上げたNPOと連携して考えていくことになりそうです（**写真2、3**）。他の3つのスタジオでは、大江町の銀行跡施設の活用、高畠町の二井宿というエリアで、地域福祉をテーマとした取組を進めること、旧山形県知事公舎を活用した芸術活動拠点の運営などに取り組む予定です。

――大学の他の学科との連携はありますか。

○**岡崎**　コミュニティデザインの一環でイベントをやるような時には、その場に合ったコミュニケーションツールが必要です。大学にはプロダクトデザイン学科やグラフィックデザイン学科などもありますが、正しいことを声高に言っても相手には伝わらないので、グラフィックデザインなどのスキルはコミュニティデザインの役に立ちます。

●**醍醐**　他学科は東北芸術工科大学の大きな資源ですし、連携は図っていきたいです。それも大学の中での学びだけではなく、何か具体的なプロジェクトを立ち上げる中で学科連携をやっていけるとよいと思います。

2　コミュニティデザイナーの育成は可能か

――コミュニティデザインを高校を出たばかりの学生にマスターしてもらうというのは簡単ではないと思います。現在1期生が2年目に入ったところだと思いますが、「コミュニティデザイナーの育成」を実現するために、ポイントとなるのはどんなことでしょうか。

●**醍醐**　コミュニティデザイナーの育成には前例となるモデルがないので、学生と一緒に学科としての価値を高めていくという意識で進めています。現場での実践の経験を通じて成長してもらうことが一番重要ですので、そういう場をどれだけ用意できるかが勝負だと思います。

（注1）調査季報172号（2013年3月発行）の第二特集「ソーシャル・キャピタルとコミュニティデザイン」に山崎亮氏の講演録が掲載されています。

写真2　金山町でのヒアリング

写真3　金山町のお祭りに参加

○岡崎　コミュニティデザインは幅広い素養が必要なので、「模索の仕方」を教えて、変化に対応できる人材を育てようとしています。未開拓の部分を自分で見つけて、彼ら自身が道を作っていく。不安定であることに抗体を持てるようにする。その際、新しい時代について自分なりの認識を持って取り組むことが何より必要です。

コミュニティデザイナーは答えがない課題に対して試行錯誤ができる人材

――コミュニティデザイナーに向いている人はどんな人でしょうか。

○岡崎　答えがない課題に対してすぐに答を求めようとせずに、試行錯誤をできる人。自分ができないことについて、受け入れることができる人でないと、どこかで壁に突き当たった時に苦労すると思います。

また、楽しくやれる技術が必要です。取組の中に「美味しい」とか「かわいい」とか「美しい」などの要素がないとうまくいかない。東北芸術工科大学では、他の学科の授業で、そうした要素の生み出し方も学ぶことができます。

●醍醐　まずは素直な人だと思います。教員の言ったことをまずはやってみるということもありますが、コミュニティデザイナーとしては、現場に入った時に、地域の人から「かわいがられる」というのも大事ですね。ある程度の失敗も許されるのが学生の特権ということもありますから、思い切って「トライアルアンドエラー」ができる人。躊躇せずに地域に飛び込んでいける人、という言い方もできると思います。あとは、地域のいいところを発見できるということも重要ですね。

地域について考える高校生を育てる合宿や出前授業を実施

――現時点で課題と感じられていることはありますか。

○岡崎　コミュニティデザイン学科で教える中で分かってきたのは、地域について考えられる学生を高校生の時から育てることが必要だということです。それをしておかないと、大学で都会へ行ったまま戻ってこない。こうしたことについて高校の先生があまり問題意識を持って考えていないことに危機感があり、高校生の夏の合宿や出前授業などを積極的に行っています（写真4、5）。

また、卒業後は2年間、大学院ではなく、有期有給の試験社員としてお金をもらいながら学べるような仕組みを作ろうとしていまして、高校の3年、大学の4年、卒業後の2年と9年間という長いスパンの中でコミュニティデザイナーとして成長していける環境づくりをしていきたいと思います。

●醍醐　高校は学力以外の地域への問題意識などの面について、大学でなんとかしてくれると思っているようですが、社会が変わってしまっているので、考え方を変えなくてはいけません。

あとは先ほども言いましたが、学生の学びにつながる現場をどれだけ確保できるか。それに尽きるように思います。

3　横浜へのメッセージ

――東北芸術工科大学のようなコミュニティデザイン学科が全国に増えるとよいと思いますか。

○岡崎　宇都宮大学では28年4月にコミュニティデザイン学科を新設しようとしているようです。今年文部科学省から通知が出されましたが、国が人文系の学部の再編を進めています。その影響もあってか、地方創生をテーマにした学部・学科が増えています。

今後、コミュニティデザイン的な内容を学べる大学は増えていくとは思いますが、内実を伴った学科にするのは簡単ではないと思います。コミュニティデザインを教えるためには現場を確保することを初めてとして、大変な手間をかける必要があります。その手間をかけられる研究者をどれだけ確保できるか疑問ですし、また、研究者たちが専門性という壁を越えて学科として連携をしながら機能することも簡単ではないと思います。大学という形にこだわらず、民間に育成組織があってもいいかもしれません。

●醍醐　冒頭にも言いましたが、コミュニティデザインについては社会的なニーズがあると感じていますので、コミュニティデザインを専攻する学科が増えて、コミュニティデザイナー的な人材が増えていくのは素晴らしいこと

写真4、5　高校生の夏合宿「SUMMER IDEA CAMP」（平成27年8月実施）

（注2）京都市まちづくりアドバイザー
まちづくりに関する専門的な立場から、区役所・支所の職員とともに、区民の自主的活動を支援し、区役所・支所が実施する「まちづくり事業」全般の企画・運営への助言を行う週4日勤務の非常勤嘱託員。2015年4月現在14名体制。具体的には、事業や取組内容の企画・立案、ワークショップの運営、コーディネート、情報の収集と発信、地域の主体性とやる気のサポート、人材育成・発掘などに活躍している。

だと思います。そうした動きの中で、「コミュニティデザイン」という分野が確立されていって欲しいですね。

東北で地方のコミュニティの暮らしの工夫を肌身に感じられる経験を

――最後に横浜市へのメッセージなどがあればお願いします。

○岡崎　私は横浜出身ですが、横浜ではスマートさや合理性を求められるという印象があります。ある種の理論を語りながらでないと受け入れられず、「とにかくやってみるか」と言う風になかなかならない（笑）。そんな中で泥臭いことも含めて粘り強くやっていく中で、横浜に合った「ライフスタイル」をデザインすることが必要ではないでしょうか。

　また、横浜の小中学生は横浜に愛着が強いと思いますが、それでも東京に流出してしまう。横浜は地域ごとに特色がありますが、地域に対する愛郷心が強いところはそれを活かしたりして、新しい「横浜流の郷土愛」を育てないといけないですね。

●醍醐　横浜は都市デザインを始めとして、都市計画やまちづくりの教科書にも登場するような先進的な取組を数多く実施してきました。今後は福祉や教育など、市民生活にかかわる幅広いテーマについて市民が語り合っていけるようなコミュニティデザインをすると、その中からまた次の先進事例が生まれてくると思います。

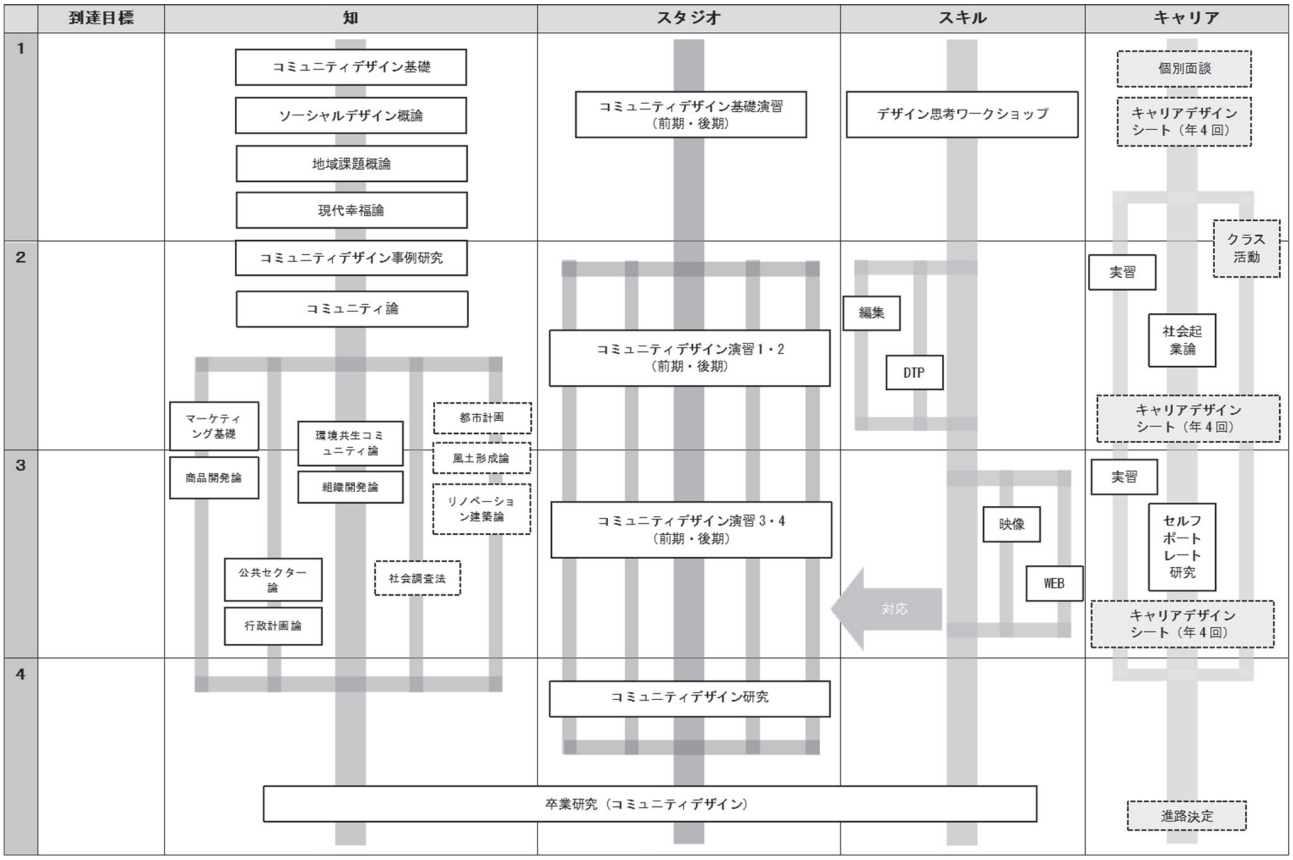
　行政の中のコミュニティデザイナー確保策としては、今年7年目を迎えた京都市のまちづくりアドバイザー制度も参考になると思います（注2）。

○岡崎　ぜひ、横浜市の高校生も東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科に学びに来てほしいと思っています。冒頭にもお伝えしましたが、東北は「課題先進地」です。人口減少、少子高齢化とはどんなものなのかを肌身で感じることができます。また、東北にはまだまだ支え合いの文化が残っています。都市部やニュータウンでは体験できない、人と人とが思いやることの温かさ、祭りや結などコミュニティづくりでの工夫など、東北ではまだまだ体験することができます。こうしたことを机上だけで理解するのではなく、心と体で体験し、腹落ちしなければ、本質的な理解にはつながらないと思っています。また、そのような経験は都市のコミュニティを考える上でのヒントにもつながると思います。

　今まさに、横浜生まれ、横浜育ちの私が東北に育てられています。都市と地方、共栄できる関係性を生み出していけたらうれしいです。

――お忙しい中、ありがとうございました。

（平成27年8月6日と9月1日に行ったインタビューを基に編集部でまとめました。）



コミュニティデザイン学科カリキュラム（平成26年4月現在）